

健康文化

トータルヘルスプランナー（THP）養成コースの3年間の振り返り

奈良間 美保

I. はじめに

名古屋大学では、医学部保健学科に基礎教育をおく医学系研究科として、看護学、医療技術学、リハビリテーション療法学の3専攻から成る博士課程（前期課程・後期課程）が設置されています。前期課程は、リーダーシップを発揮し得る保健医療従事者とともに、学術研究を推進する研究者・教育者の養成を、後期課程は、創造的な研究活動によって真理を探究し、現代の医療における諸問題を発展的に解決できる人材の養成をそれぞれ目標に掲げています。平成14年に前期課程、平成16年に後期課程が設置された以降、専門性の高い教育が提供されてきました。その一方で、他専攻の教育・研究活動に触れて多職種協働の意識を育む機会が少ないことが課題でもありました。このような中、名古屋大学全体のライフピア構想の一環で、新たな医療人の育成を検討することになり、平成19年に本研究科に専攻横断型の教育プログラムとしてトータルヘルスプランナー（以下、THPとする）養成コースが設置されました。同年、文部科学省大学院教育改革支援プログラムに「専攻横断型の包括的保健医療職の育成」が採択されたことは、本コースの教育の実質化において大きな励みとなりました。本稿では、設置後4年目を迎えたTHP養成コースの取組みを振り返ります。

II. THP 養成コースの概要

THP 養成コースは、現代社会の医療ニーズの多様化と今後の超高齢社会を見据えて、看護学・リハビリテーション療法学専攻を中心に、従来の各専攻・領域別教育に横断型の共通科目を追加履修する大学院教育プログラムとして、博士課程（前期課程）に設置されました。少子高齢社会を包括的に支える健康増進モデルを開発・推進する人材育成を目指して、（1）対象の身体・心理・環境の側面に対して、健康問題とライフサイクルの視点から総合的に捉える能力の修得、（2）対象のニーズに基づき、必要な医療情報・福祉情報を正確かつ迅速に収集・分析する能力の修得、（3）専門性の発揮と関連職種との連携によって

健康的な生活を整えるプランを提供する能力の修得、を教育目標としています。

THP 養成コースの特色の一つは、【専攻横断型の教育体制】にあります。医学系研究科の看護学・リハビリテーション療法学専攻の教員を中心に THP 運営委員会を立ち上げて、医学部老年情報学寄附講座（平成 18～20 年）、愛知県等との連携による横断的教育組織による幅広い内容の教育活動に取り組みました。この教育体制の下、【系統的で段階的な教育プロセス】を提供する THP 養成コースでは、専攻横断型の共通カリキュラムとして、THP 概論・特論・演習・セミナーの 4 科目計 8 単位を段階的に履修することで、多職種協働の意識をもつ保健医療職を育成します。共通科目において一定の成績を修めた者には、医学研究科長が THP 学内認定を行ないます。さらに、【多様な領域の研究と実践活動に触れる中で培われる科学的思考】に着目して、ライフトピア連携研究会や関連研究会を開催しています。関連分野の包括的で新たな発想による研究・実践活動に触れることで、学生自身の知的好奇心が高まり、専門性を超えた研究課題の発想づくりが促進されることを目指しています。

Ⅲ. THP 養成コースのカリキュラム

THP 養成コースでは、1 年前期の THP 概論を、THP としての素養を養う入門リテラシーとして位置づけて、疫学研究の基礎、倫理、愛知県行政職による保健医療福祉行政の動向、実践家による地域医療の現状と課題を学びます。1 年後期の THP 特論では、多職種の専門性の理解を広げるために、在宅療養および高齢者リハビリテーションに関して看護学、理学療法学、作業療法学の立場から各教員が講義を行ないます。特論の最後の授業では、多職種の役割についてグループで討議し、互いの役割の理解につなげます。さらに、2 年前期の THP 演習では、前半はコミュニケーションスキル等を学び、後半には、事例を設定した多職種協働模擬カンファレンスを行ないます。専門性の異なる学生 6～7 名程のグループ編成で事例検討を行なう中で、学生は多職種で目標を共有する難しさや意義を実感しています。さらに、THP セミナーは、通年でほぼ 1～2 か月に 1 回、学内外の関連領域の研究者および実践家を招き、地域で暮らす人々の生活支援につながる活動報告を行なうライフトピア連携研究会への参加が単位取得の要件となります。このような段階的な学修プロセスによって、多職種協働の意識と実践能力の向上を目指します（写真 1、図 1）。



写真1 THP 演習 教員による事前討議(左) , 多職種模擬カンファレンス(右上)

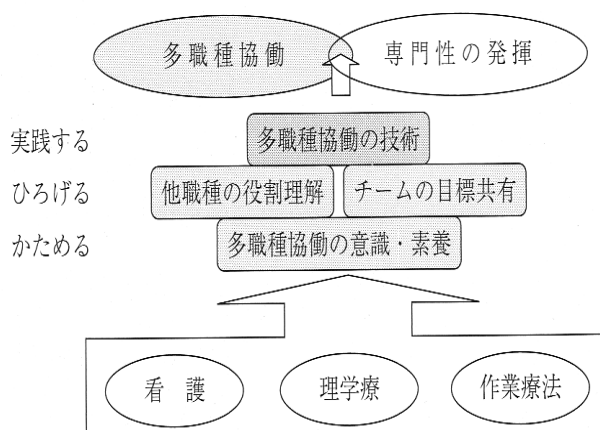


図1 THP 教育プログラムのねらい

IV. THP 養成コースの3年間の取組み

①大学院教育プログラムの改革と実質化

THP 養成コース設置当初、THP 共通科目は前期課程の修了要件とは異なる追加履修としての位置づけでしたが、平成 22 年度より、THP 概論・特論の 2 科目を修了要件の対象となる科目に位置づけて、カリキュラムの安定化を図りました。また、希望する後期課程学生を履修生として受け入れることにより、授業中の討議が活性化し、学習が深まることを実感しています。初期の学生からの「各 THP 共通科目のコース全体における位置づけが理解しにくい」との意見に対しては、各科目の位置づけと学習のねらいを学生に伝えて、教授方法の改善に努めました。本教育プログラムに対する修了時点での学生による授業評価では、勉強になった(とても勉強になった・少し勉強になった)との回答が、THP 概論は平成 20 年度 75.0%から平成 21 年度 85.0%に、THP 特論は、平成 20 年度 75.0%から平成 21 年度 90.0%に上昇し、THP 演習とセミナーについては、平成 20・21 年度共に全員が勉強になったと回答するなど、授業評価には一定の成果が認められています(図 2)。

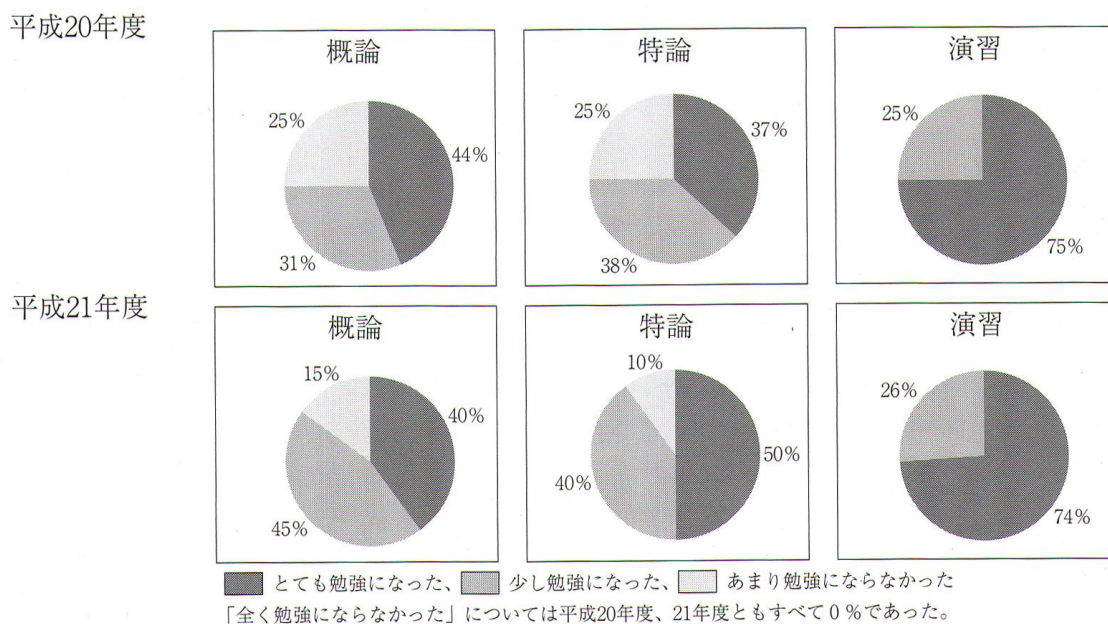


図2 学生による THP 養成コースの評価

②患者・家族中心のチーム医療を推進する医療人の育成

THP 養成コースで取り組んだ専攻横断型の系統的な大学院教育プログラムには、横断型の教育組織の整備と実際の教育活動における協働のみならず、理念の共有も求められます。本コースでは、北米で推進されている *patient-and family-centered care* の考え方を取り入れて、尊厳・尊重、情報共有、参加、協働を主要概念として、患者・家族と医療者との有益なパートナーシップを築くアプローチの重要性を強調しています。これらを基本理念として一貫した教育を提供することの意義は大きいと思われます。THP 養成コース履修生の最終レポートでは、「このコースを選択したことにより、自分の行動をみつめなおすことができました。(中略) せっかく学んだ THP という役割を、担っていくことができるよう、知識や技術を深めていきたい。(看護学専攻)」「THP は、これからの自分たちの活動や働きかけによって変化してくるため、その行動に責任をもっていくことが重要です。そのために日々自らできる努力をしておくことが大切であります。(リハビリテーション療法学専攻)」など、THP としての役割は未だ漠然としていながらも、その重要性を実感していることがうかがえます。

THP 養成コースは、設置当初は 20 名を想定しましたが、第 1 期の平成 20 年度は 24 名（専攻：看護学 16 名、リハビリテーション療法学 8 名）、平成 21 年度は 21 名（専攻：看護学 8 名、リハビリテーション療法学 15 名）に THP の学内認定を行ないました。修了生の進路は、病院、行政、訪問看護ステーション、障がい児者施設、保健所・保健センター、大学教員、進学など多様で、看護・

理学療法・作業療法のいずれかの専門領域に基盤を置き、「それぞれの立場で多職種協働の意識をもちながらチーム医療を推進する人材」として活躍されることが期待されます。

③社会的要請への対応と修了生との連携

平成19～21年度には毎年1回、THP養成コース公開シンポジウムを開催し、多職種協働アプローチ、患者の意向による終末期医療、患者・家族中心の在宅療養などをテーマに、国内外の研究者・実践家の講演等を行ないました。また、平成20年には市民公開講座を開催し、地域住民と交流の機会をもちました。これらのTHP養成コース関連事業には、多くの保健・医療・福祉職、市民に参加いただけたことから、本コースの理念が社会的ニーズにある程度適ったものであることがうかがえます。今後、THP養成コースがより一層社会の期待に応える教育課程となるためには、様々な立場で活躍する修了生や所属施設との連携を密にとる中で、THPが担う役割やその効果を明らかにすること、本コースの在り方を継続的に検討することが必要と考えます。

4. おわりに

超高齢社会を見据えた社会的ニーズに対応する医療人の育成を目指して始まったTHP養成コースは、学生のみならず教員間の協働を生み、大学院教育全体の活性化に少なからず繋がっていると思われます。今後も科学的根拠を探究しながら現代医療の課題に注目し続ける人材の育成プログラムとして、より一層の充実が求められます。

最後に、これまでTHP養成コースにご協力いただいた多くの皆様に感謝申し上げます。

(名古屋大学医学部教授、保健学科看護学専攻)